

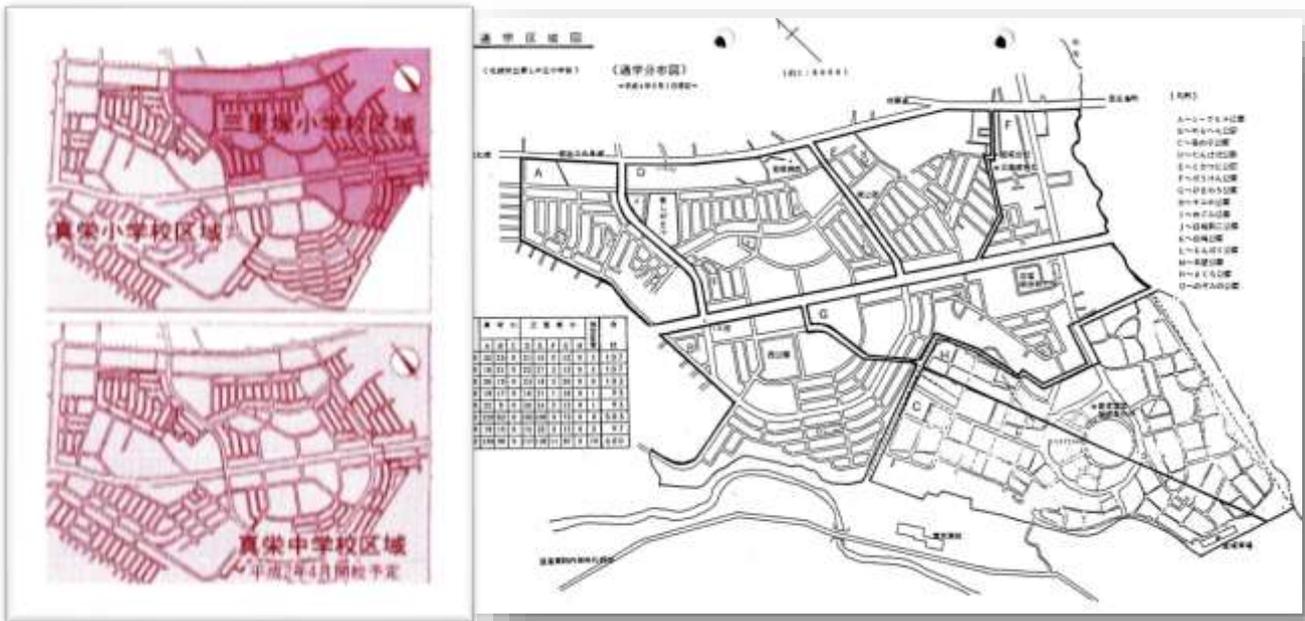
美しが丘への歴史の旅

次の地図の「上」が、美しが丘小学校が開校したときの「通学区域」，「下」が美しが丘緑小学校が開校してからの美しが丘小学校の通学区域です。「羊ヶ丘通り」の南側は、現在の「美しが丘緑小学校」の通学区域です。それでは、この「美しが丘地区」が、どのように発展してきたのかを確認する「歴史の旅」に出かけてみます。

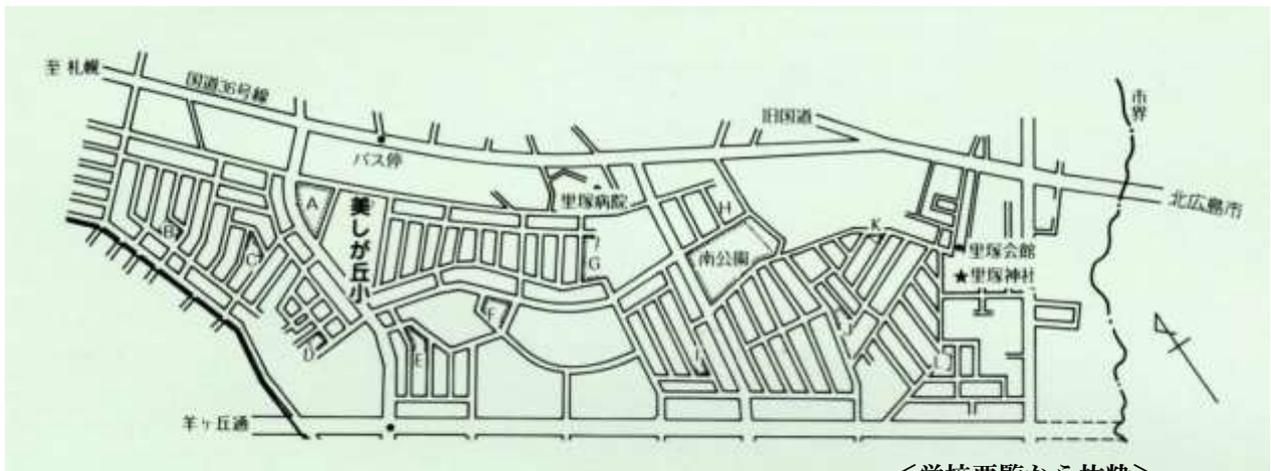
最初に、次の地図を見てください。

(開校前の通学区域図)

(開校後の通学区域図) <職員の手作りです>



(現在の通学区域図)



<学校要覧から抜粋>

美しが丘小学校は、北緯42度59分2.9秒，東経141度27分14.6秒にあります。

1, 大昔の北海道

(1) 日本の「歴史時代区分」

- ① 旧石器時代 (約10万年前から約1万年前まで)
- ② 縄文時代 (約12000年前から紀元前3世紀頃まで)
- ③ 弥生時代 (紀元前3世紀から3世紀頃まで)
- ④ 古墳時代 (3世紀後半・4世紀初めから7世紀前半・8世紀初めまで)
- ⑤ 飛鳥時代 (6世紀後半から710年まで)
- ⑥ 奈良時代 (710年から794年まで)
- ⑦ 平安時代 (794年から1183年まで)
- ⑧ 鎌倉時代 (1183年から1333年まで)
- ⑨ 建武の新政 (1133年から1335年まで)
- ⑩ 室町時代 (1336年から1573年まで)
ア 南北朝時代<1336年から1392年まで>
イ 戦国時代 <1493年から1573年まで>
- ⑪ 安土桃山時代 (1573年から1603年まで)
- ⑫ 江戸時代 (1603年から1868年まで)
- ⑬ 明治時代 (1868年から1912年まで)
- ⑭ 大正時代 (1912年から1926年まで)
- ⑮ 昭和時代 (1926年から1989年まで)
- ⑯ 平成時代 (1989年から現在まで)

(2) 北海道の独特の時代区分

北海道に人びとが住みついたのは、旧石器時代(約2万数千年前)とされていますが、詳しい資料は見つかりませんでした。その後、縄文時代を経て、弥生時代へと移りました。

その後は、正確には分かっていませんが、北海道では学問上から、「日本の時代区分」に示した「飛鳥時代」から「江戸時代」までを独特の区分としています。それは、「**続縄文時代**」→「**擦文時代**」→「**アイヌ時代**」です。そして「明治時代」となるのです。

(3) 北海道の誕生

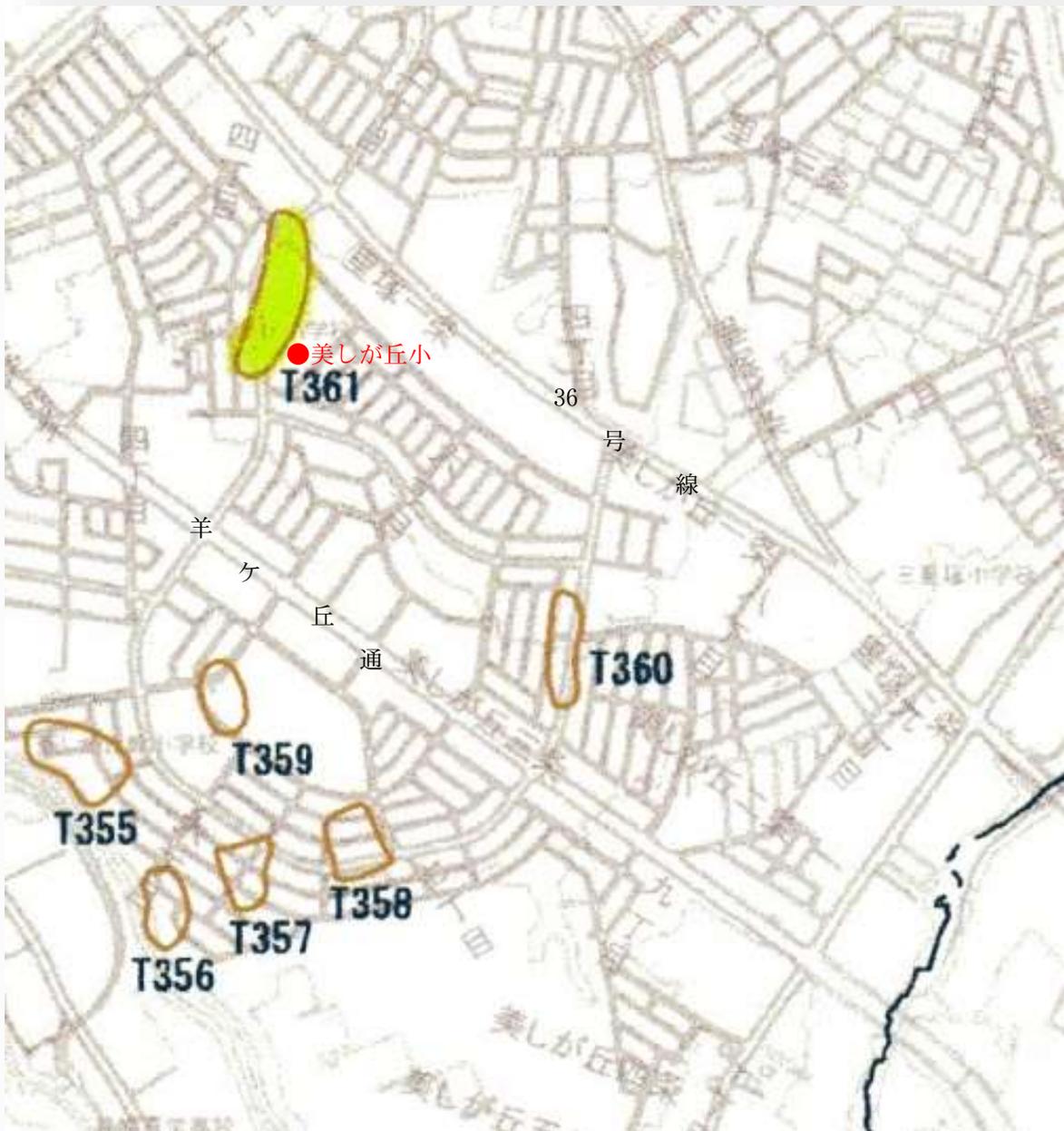
北海道が{島}になったのは、「1万年前(旧石器時代)」だったと言われています。これまでは、アジア大陸と陸続きでしたが、「氷河期」が過ぎて世界中が暖かくなり、氷河が溶けて、海の水位が高くなり、「二つの島」になりました。

その後の二つの島は、相次いで起こった「土地の隆起」と、樽前山の爆発による「火山灰の堆積」で、「一つの島」になったのが、「5000年ほど前」だと言われています。時代区分では、**縄文時代**になります。

ある学説には、現在の石狩市と苫小牧市を結ぶ幅が20キロメートル・長さが80キロメートルの広さが、二つの島の間海峡または湖に「火山灰」が積み重なって、陸続きとなり、「**石狩平野(石狩低地帯)**」になったという説があります。ですから、美しが丘地区は、この石狩低地帯の南端に含まれますので、北海道の他の地域と比べると、地質学という学問からは、古いものではないと言われています。

(4) 北海道の遺跡や遺構について

それぞれの地域に人びとが暮らし始めたことを確かめるには、「遺跡」などを発掘し、調



○で囲んだ所が、「包蔵地」なのです。この○は、既に発掘が終わっているので、新しく建物を造る時に、法律による「許可」は、必要ないとのことでした。

札幌市内には、この「許可」が必要なところが、何カ所もあります。この地図の中にある「T361」は、美しが丘小学校が隣接しているシープヒル公園と2条4丁目の一部にあたります。「T360」の地点は「南公園」のあたりです。

清田区で発見されている「土器」や「石器」の包蔵地は、里塚緑が丘で1、平岡11、北野4、真栄5、清田9、平岡公園3、美しが丘7です。

この中の包蔵地である{T276} (平岡6条3丁目) と{T361} (美しが丘) からは、「土器」や「石器」が発見されています。これらは、「縄文時代中期」のものだということが調査研究で証明されています。

つまり、美しが丘と平岡の両方は、間違いなく縄文時代中期には、先住民の人びとが使った道具であり、確かに先住民族の人びとが暮らしていたことを物語るものです。

ある学説には、美しが丘の「土器や石器」は、ここに定住した人びとではなく、移住しながら暮らしていた人びとだろとう言われています



上段の3つが {T 2 7 6} (平岡), 下段の土器と石器が {T 3 6 1} (美しが丘)



{T 2 7 6} (平岡) の土器,



{T 3 6 1} (美しが丘) の土器



{T 3 6 1} (美しが丘) の石器

この「土器や石器」は、「あしりべつ郷土館」に展示されています。
 これらの「縄文式土器」や「石器」の特徴を、イラストにしてまとめてみました。

この郷土館は、昭和50年に行われた清田地区開拓30周年記念事業の一環として、実人の労苦を想ひきの功績を讃えて建設されたものです。
 厚田藩館の直母けから180年経ち、一つの跡の積み重ねのうえに、昔ながらの農村風景として築いてきたこの地は、都立北の道沿いに立寄る。新幹線完成していきなな電線をとげるようになりました。
 このため、昭和の半ばより、地域の有志が統合し、昔の想い出を建設しようと、郷土館建設委員会が発足ののち実現に、建設費用へのけた多額が供出されるようになりました。
 このような背景のもとに、昭和50年3月、札幌市の公団により旧清田地区の建物について開拓し、日本19年分において子供学生をはじめ地域の皆様に親しまれてきました。
 しかしながら、この建物も老朽化が著しいことから、地域の有志や札幌市をはじめ関係機関のご協力により、平成14年1月に清田区民センター内に移転し、施設の運びとなりました。
 新郷土館は、展示内容に創造工夫を凝らし、コンピュータによる体験システムを導入するなど「見て、触れて、体験して自ら知る」という郷土館として一歩を踏み出しています。
 これまで以上に愛され、親しまれる郷土館を目指していく所存ですので、多くのご来館にご期待いただければ幸いです。

あしりべつ郷土館運営委員会



ご利用のご案内

- 開館時間 ● 火曜日から日曜日まで（月曜休館）
 （但し、年末年始、区民センターの開館日は休館となります）
- 閉館時間 ● AM10:00～PM4:00
- 入館料 / 無料 ●

あしりべつ郷土館
 札幌市清田区清田1番2丁目

●お問い合わせ●
 あしりべつ郷土館運営委員会
 ☎011-885-0869

●今日の清田 ●大昔の清田 ●開拓のころ ●昭和のころ

あしりべつ郷土館

1869
1892
1908
1922
1944
1961
1972
1983
1999
2001

Ashiribetsu Local Museum

Ashiribetsu Local Museum

Exhibition 1 今日清田

- 今日の清田 ● 豊かに暮らす清田地区の紹介、「清田の誕生」地名の由来、「清田の歴史発展」の解説展示を行っています。
- 池田信太郎 ● 清田全編を4000分の1の縮小で表現、主要な施設や歴史館の場所を一目で確認できます。
- 定規写真 ● 清田の移り変わる姿を4つの航空写真で比較展示、時代ごとの清田の姿をとらえた貴重な写真です。
- 展示案内コーナー ● 郷土館に新しく加わった展示室や企画展示の案内コーナー。

Exhibition 2 情報検索コーナー

- コンピュータでの情報検索 ● 自分が調べたいことや、興味のあることを自由にパソコンを利用して調べることができます。インターネットにもつながる。郷土館の展示品も検索することが可能です。
- コンピュータディスプレイ ● 案内の表示をよく見て、テーマごとに追加されるディスプレイに視線を移すことができます。
- 郷土の歴史発展コーナー ● 清田区や札幌市など、郷土に開拓した資料や資料を見ることが出来る展示コーナーです。

Exhibition 3 昭和のころ

- 大昔の清田 ● 考古資料、開拓の遺跡
- 開拓のころ ● 開拓者の生活、林業の道具、住居の再現、体験コーナー
- 昭和のころ ● 半田、開拓の道具、開拓者の道具、生活の道具
- 情報検索コーナー ● コンピューターでの情報検索、コンピュータディスプレイ、郷土の歴史発展コーナー

Exhibition 4 開拓のころ

- 住居の再現 ● 移住先で暮らした住居に当時の人物や当時の生活をしのぶ。当時の展示物を配置展示しました。
- 生活の道具 ● 生活にかかせなかった、開拓者や農業者や職人の道具、食器や日用品など身の回り品を中心とした展示を行っています。
- 体験コーナー ● 稲藁の束の上で実際に、石臼を回したりまき臼で臼を回したり小物作りなどの体験展示を行っているコーナーです。
- 林業の道具 ●

Exhibition 5 大昔の清田

- 清田の発祥 ● アイヌ民族の人々の移住や清田で発見された、石器や土器、化石の展示品。清田の地形の形成と大昔の清田の姿を知る事ができます。
- 考古資料 ●

(6) 続縄文時代・擦文時代・アイヌ時代

日本全体では、縄文時代、弥生時代、古墳時代、飛鳥時代へと過ぎていきます。この頃から北海道では、「縄文時代」、「擦文時代」、「アイヌ時代」となります。この時代についても、簡単にまとめてみました。

① 続縄文時代（オホーツク文化）

北海道では、鉄器が伝来し、縄文文化を継続しながら、古墳時代から6世紀頃まで続いたのが、「続縄文時代」です、この中の、続縄文から擦文時代に並行して発展した「オホーツク文化」があります。

オホーツク文化は、大正2年に「モヨロ貝塚」を発見したことで明らかになりました。それは、3世紀から13世紀までオホーツク海沿岸を中心として樺太や南千島の沿海部に栄えた古代文化です。特に、海獣狩猟や漁労を中心とした生活を送り、土器（縄目の模様をつけている）・石器・骨角器・木器・竪穴式大型住居や小型の竪穴式住居の遺跡などが発見されています。オホーツク文化は、大陸系文化の影響が明らかに認められており、後に擦文文化の要素を取り入れるようになり、アイヌ文化を形成するようになるのです。これらの資料は、「モヨロ貝塚館」（上の写真）でみることができます。



オホーツク土器と住居跡



② 擦文時代（擦文文化）

擦文時代は、7世紀頃から13世紀（飛鳥時代から鎌倉時代後半）にかけて、北海道を中心とした「擦文文化」が栄えた時代です。土器は、表面を整えるために、木のへらで擦っています。生活は、狩猟や採集に適した住居を構えていました、本州の人びとと同じように「かまど」が据えられるようになりました。例えば、河口近くの丘に竪穴住居の大集落を備え、河の奥には小さな集落を作っていました。

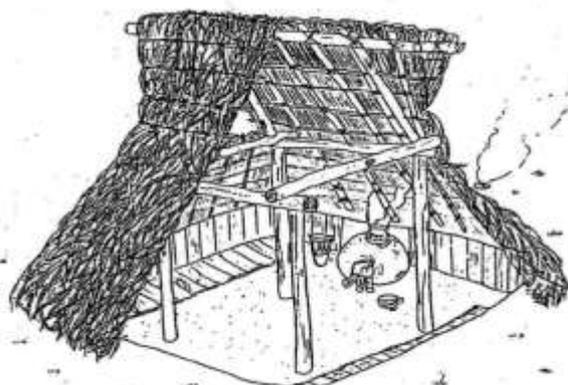
8世紀後半9世紀（奈良時代から平安時代初期）には、北海道式古墳と呼ばれる小型の墳丘墓が、石狩平野の西部と勇払平野に作られたと言われています。遺跡としては、常呂遺跡（次頁の写真の「ところ遺跡の森」）・北斗遺跡（擦文の村と名付けられた復元住居）・

標津遺跡群などがあり、見学もできます。

人びとは、漁労が中心の生活でしたが、狩猟や麦・粟・キビ・ソバ・ヒエ・緑豆などの栽培植物の雑穀農業から食料を得ていたそうです。また、鉄器はナイフにして、木器を作る加工の道具として用いていたそうです。他には、斧・刀・鋏・釣り針・裁縫用の針などの鉄製品が使われたそうです。中国の銅銭や銅の鏡なども発見されていますが、これは本州との交易で手に入れたと思われます。さらに、製鉄所はありませんが、鉄の加工の跡（鍛冶）が発見されています。



竪穴式住居跡



住居の予想図

右の写真は、「擦文土器」です。発掘された場所は不明ですが、文字のようなものが刻まれているそうです



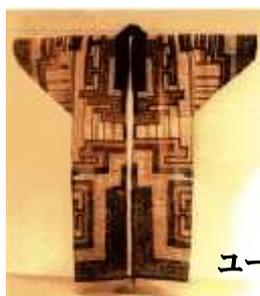
③ アイヌ時代（アイヌ文化）

アイヌ文化は、擦文文化を担った人たちが、時代が過ぎると同時に、新たな文化要素を創り出したことでできた新しい文化様式と言えます。全く別の民族が北海道に移住したとして創った文化ではないということです。

人びとは、鉄製の鍋・漆器のお椀・ぼうしゅ箸・骨角器の狩猟具・鮭漁用の道具などの道具を使用していました。

これらは、地域によって違いが見られたそうです。樺太アイヌは、犬橇やスキーなどを使い、オホーツク文化の影響を受けていたそうです。

暮らしは、「コタン」（5～6軒単位）（右の写真を参照）でした。特徴としては、「アイヌ文様」や文芸作品の「ユーカラ」などがあります。（下の写真を参照）



ユーカラの晴れ着

ですから、北海道ではオホーツク文化→擦文文化→アイヌ文化を経て、「明治時代」になったとも言えるでしょう。



コタンの復元風景

2. 江戸時代の北海道

江戸時代は、松前藩（現在の松前郡松前町）が福山城（北海道で唯一の城）を築き、藩士が住んで、蝦夷地（現在の北海道）を治めていました。

松前藩は、蝦夷地（蝦夷が島とも呼ばれていた）の各地と船で連絡はとっていましたが、内陸の山や川や平野などは、ほとんど分かっていませんでした。

1792年に旧ロシアのラクスマンが松前に来て、貿易の申し出をしました。松前藩はそのことを徳川幕府には知らせました。徳川幕府は、最上徳内や近藤重蔵に命じて、蝦夷が島の本格的な調査を始めました。

1800年には、伊能忠敬や間宮林蔵が測量して、ようやく北海道（蝦夷地）の地形の凡そが分かるようになりました。

それとは別に、松浦武四郎が、箱館の商人の手代ということにして、5年間で3回も蝦夷地をくまなく歩き、地図を作成しました。

海岸線がただしく描かれ、内陸の山や川の様子、平野の広さなどがはっきり分かるようになりました。

このように、徳川幕府が蝦夷地を知るようになった頃には、アイヌの人びとが暮らしていました。本州から来る人は、お互いが必要な品物を交換しました。しかし、時がたつにつれて、その取引に不正なことが出始め、争いにまで発展しました。

江戸時代の終わり頃の日本は、尊皇攘夷の争いが各地で起こりました。その中の「鳥羽伏見の戦い」（戊辰戦争の始まり）で尊皇軍が勝利しましたので、江戸城が開城され、明治新政府が成立しました。

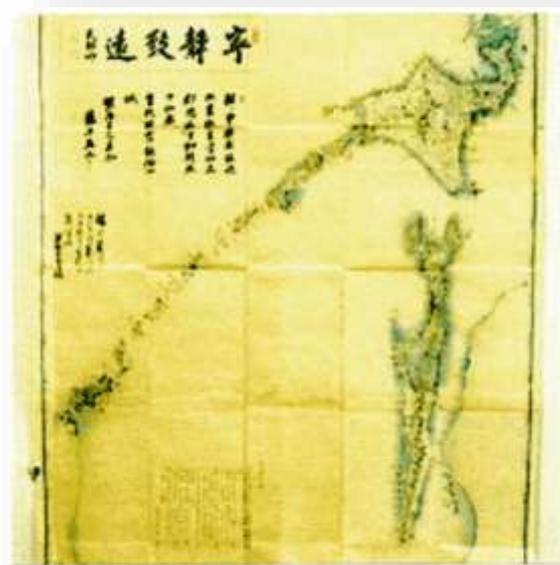
この戊辰戦争は、明治元年の「箱館戦争」で幕府軍の榎本武揚が「五稜郭」を占領して政府軍と戦い、敗北したことで終わりました。



松前城（福山城）



松浦武四郎



松浦武四郎が作った蝦夷地図（北海道）



2002年頃の五稜郭



復元された箱館奉行所（2010年）

※ 「五稜郭」～徳川幕府が1857年から1864年にかけて、多くのの人とお金をかけて、蝦夷地と函館を守る役所（箱館奉行所）を作りました。この役所は、海岸の近くなので危険だと考えたので、五稜郭に移しました。この五稜郭は、石垣と堀で囲んであり、堀は上から見ると「星の形」をしています。

3. 北海道の開拓の始まり

1868年（明治元年）に明治政府は、徳川将軍が住んでいた「江戸」を「東京」と改めて、日本の首都としました。1869年（明治2年）、「戊辰戦争」は「箱館戦争」で、完全に終わりましたので、明治政府は、「北海道の開発と外国からの守りを一層進めなければならぬ」と考えました。

明治3年にはその開発の仕事をする役所、「北海道開拓使」を作りました。その考え方は次の通りです。

- ① 開拓使庁を「札幌」におく。
- ② 開拓の仕方を詳しく知っている外国人に教えて貰う。
- ③ 若い優れた人を外国で学ばせて、それを北海道の開拓に生かす。
- ④ 新しい産業を始めるために、外国の器械を買う。
- ⑤ 開拓にかかるお金は、政府が負担をしよう。

このように、早く北海道を切り開いて、安心して住める土地にすることが、開拓使の大事な役目でした。北海道に移住する人を募集しましたが、本州の人びとは、北海道は原始林が生い茂り、雪が多く、手足が凍るほど寒く、熊や狼が多くて危険、だと考えている人が多くて、なかなか住もうとはしませんでした。

しかし、少しずつ開拓移民の人びとが住み始めて、自然を切り開く強い心と体を持ち、苦しさに耐えながら、開拓に励みました。

その他に「開拓使」は、北海道の開発を進めていくためには「蝦夷地」や「アイヌ語の地名」では不便なことが多いので、広い土地を区切ることにしました。

当時の開拓使の長官は「鍋島直正」、長官を助ける判官は「島義勇」「松浦武四郎」「北村道俊」「松本十郎」たちがいました。その中の「松浦武四郎」が、北海道を「11の国」に



明治10年の開拓使本庁舎

分けて名前を付けました。

これらの名前が、しばらくは住所の基本として使われました。

例えば、「石狩郡」「天塩郡」「十勝郡」「日高郡」「釧路郡」などのように、現在でも住所として使われています。

なお、これらの地名（国の名）など、北海道の地名のもとになった事柄を調べてみるのも秘湯の楽しみになるのではないのでしょうか。



4. 札幌の開拓の始まり

(1) 地名の起こり

① 札幌

札幌の地名の起こりは、アイヌ語の「サツ・ポロ・ベツ」と言われています。

この言葉の意味は、「かわいた＝サツ，広い＝ポロ，大きな，川＝ベツ」です。

これは、現在の「豊平川」をそう呼んだからです。

「サツ」この豊平川は、大昔から定山溪の方からたくさん泥や砂・石を運んで来るので、藻岩山（アイヌ語でインガルンペ）の山麓の土地にそれらを置きながら、流れを変えて扇状地を作りました。

江戸時代の後半には、この札幌にはアイヌの人びとが暮らしていました。

正確な数は不明ですが、その中の、茨戸アイヌの最後の一人だった「能登酉雄」さんが語っていたのは、

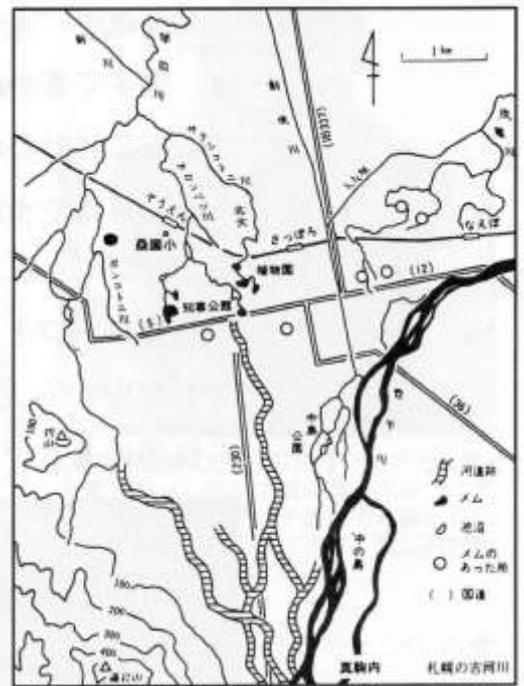
「昔、大洪水があり、インガルンペ（藻岩山）を目指して丸木船を漕いだ。ようやく乾いた土地に着いた。そこから、サツポロと呼ぶようになった」とのことでした。

② 月寒

美しが丘への歴史の旅に登場する地名です。月寒の地名の起こりは、アイヌ語の「チキサブ」から出たものです。この言葉の意味は、「火をするところ」と言われています。その後には、ツキサップになり、月寒という漢字が当てられました。

③ 豊平

美しが丘への歴史の旅に登場する地名です。豊平の地名の起こりは、アイヌ語の「トエピラ」「トイエ・ピラ」から出たものです。この言葉の意味は、「つぶれた崖」と言われています。豊平川の河岸には、岩石が表れているところが多いからだと言われています。



④ アシリベツ

現在の「清田区」にあたる地域の地名です。アシリベツの地名の起こりは、アイヌ語の「アシリ・ベツ」から出たものです。この言葉の意味は、「新しい川」といわれています。漢字にあてると「厚別」になりますが、「厚別区」との関係については、詳しく調べることができませんでした。

(2) 札幌の開拓

① 札幌の開拓の始まり

明治政府は、「廃藩置県」の制度を作りました。そのため、江戸時代までは、「〇〇藩」に属していた人びとは、暮らしに困るようになりました。

その困った人びとをなくするためにも、北海道へ渡って開拓する人びとを募集することになりました。その結果、明治2年に「庚申農民」として約400人が、札幌に最初に入植しました。

この約400人が入植した土地は、庚申一の村(現在の苗穂)、庚申二の村(現在の丘珠)、庚申三の村(現在の円山)と呼ばれました。これが、札幌の開拓の始まりです。

このように、札幌の開拓が始まってからの「明治14年」と「大正元年」の戸数と人口は目を見張るものがありますので、その変化をまとめてみましょう。

(地域)	(明治14年の人口と戸数)		(大正元年の人口と戸数)	
1) 札幌市街	1136人	3823戸	15478人	76419戸
2) 山鼻村	64人	154戸	明治39年に円山村と合併＝藻岩村	
3) 円山村	56人	254戸	457人	2745戸
4) 琴似村	303人	1442戸	861人	6907戸
5) 手稲村	130人	511戸	695人	4324戸
6) 豊平村	月寒村・平岸村・豊平村の3村が合併		1625人	6682戸
7) 白石村	96人	458戸	700人	4466戸
8) 札幌村	69人	300戸	835人	5377戸

これらの村の多くは、明治4年にかけて東北地方や北陸地方からの移民が次々と入植したことによるものです。

明治8年の琴似屯田兵村や、明治9年の山鼻及び発寒屯田兵村は、宮城県を中心とした青森県・福島県・秋田県・山形県・岩手県からの東北地方からの入植が多かったのです。

明治20年には、開拓事業がほぼ終了しました。開拓移民の方は、東方地方だけではなく、四国・九州からもあったそうです。



明治5年；源氏の植物園付近



明治5年；創成川付近



明治8年開墾のようす



明治8年；酒田県士族の屯田兵



明治8年；札幌製糸所



明治9年；札幌麦酒製造所



明治12年；真駒内牧牛場



明治22年；北海道庁舎



明治14年；現在の南1東3



大正12年；豊平橋

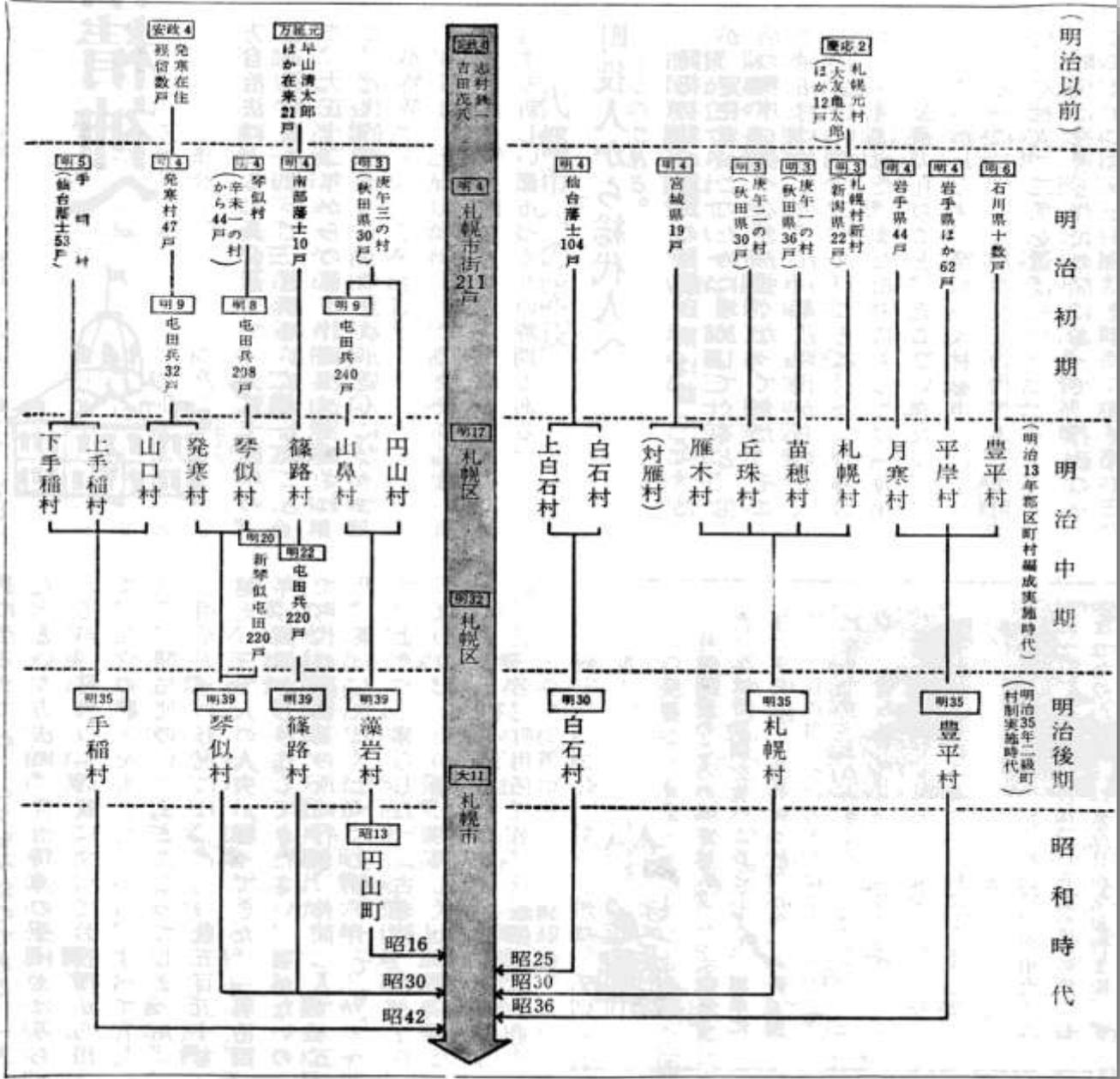


札幌・幌内間を走った義経号
明治15年；札幌・幌内間の義経号



北海道開拓記念館の復元された開拓小屋

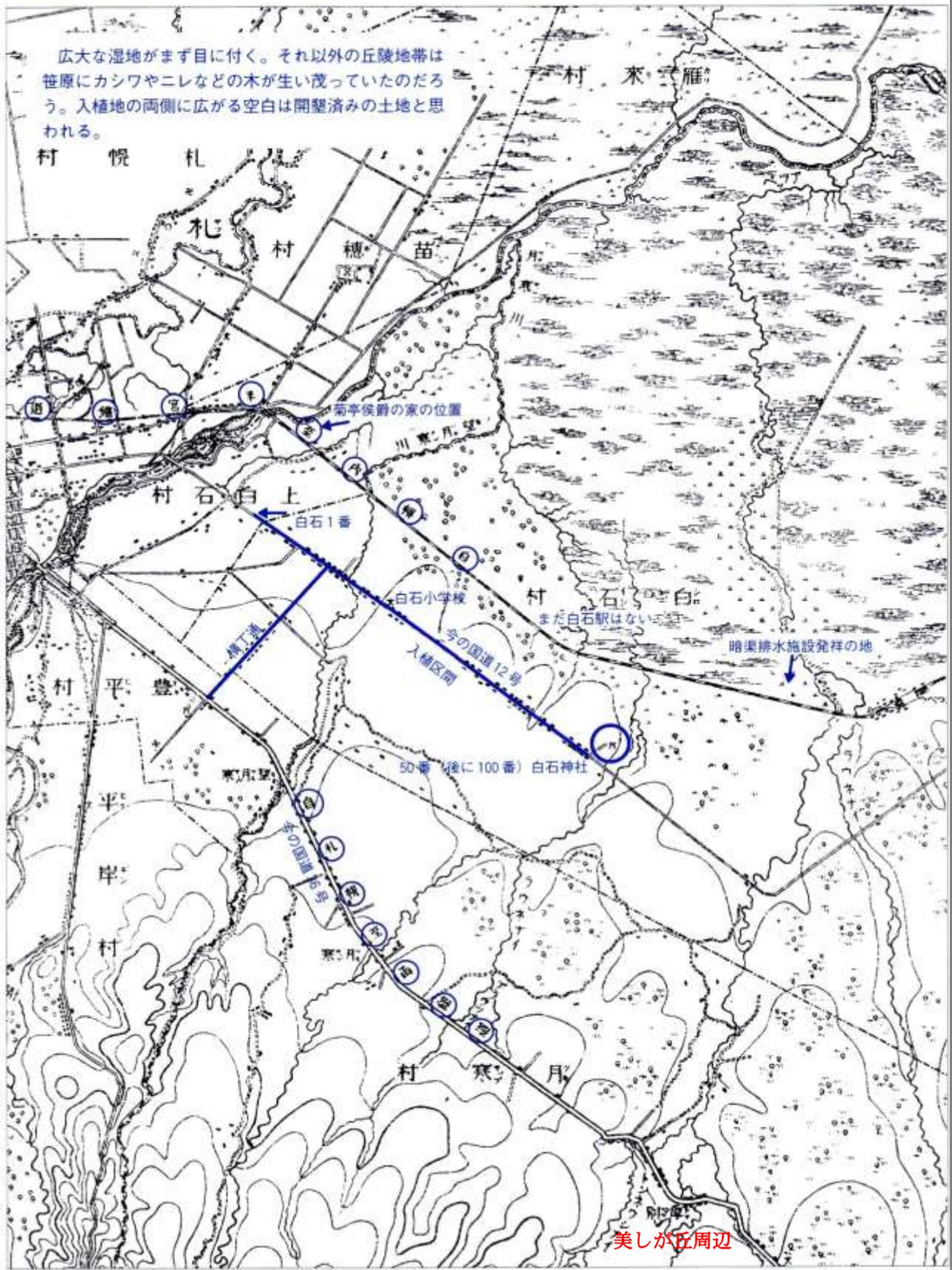
<札幌の村落の移り変わり>



<明治初期の学校>

学校名	開校	館長	現在
資生館	明治 3年	大場 機	資生館小学校 (創生小学校)
時習館	明治 5年	三木 勉	手稲東小学校
善俗堂	明治 5年	杉山 順	白石小学校
教育所	明治 5年	(不明)	篠路小学校
教育所	明治 8年	荻野 景範	円山小学校
六号学校	明治 8年	屯田兵	琴似小学校
夜学校	明治 9年	屯田兵	山鼻小学校

明治29年の5万分の1地形図



※ この地図では、右下が、美しが丘方面になります。

こうして開拓が始まった札幌の特徴は、道路整備にも見られます。開拓が始まって間もなく「開拓使」は、創成川と南1条通りを「起点」として、碁盤状に「1町（約109m）四方」に区切り、東西南北に道路を造りました。その中央部分になるところは、東西にその幅「105m」の「防火帯」を設けました。これが、現在の「大通公園」なのです。

当時は、現在の大通公園の北側は「官地」、南側を「民地」と定めたそうですが、その名残が今でも残っています。

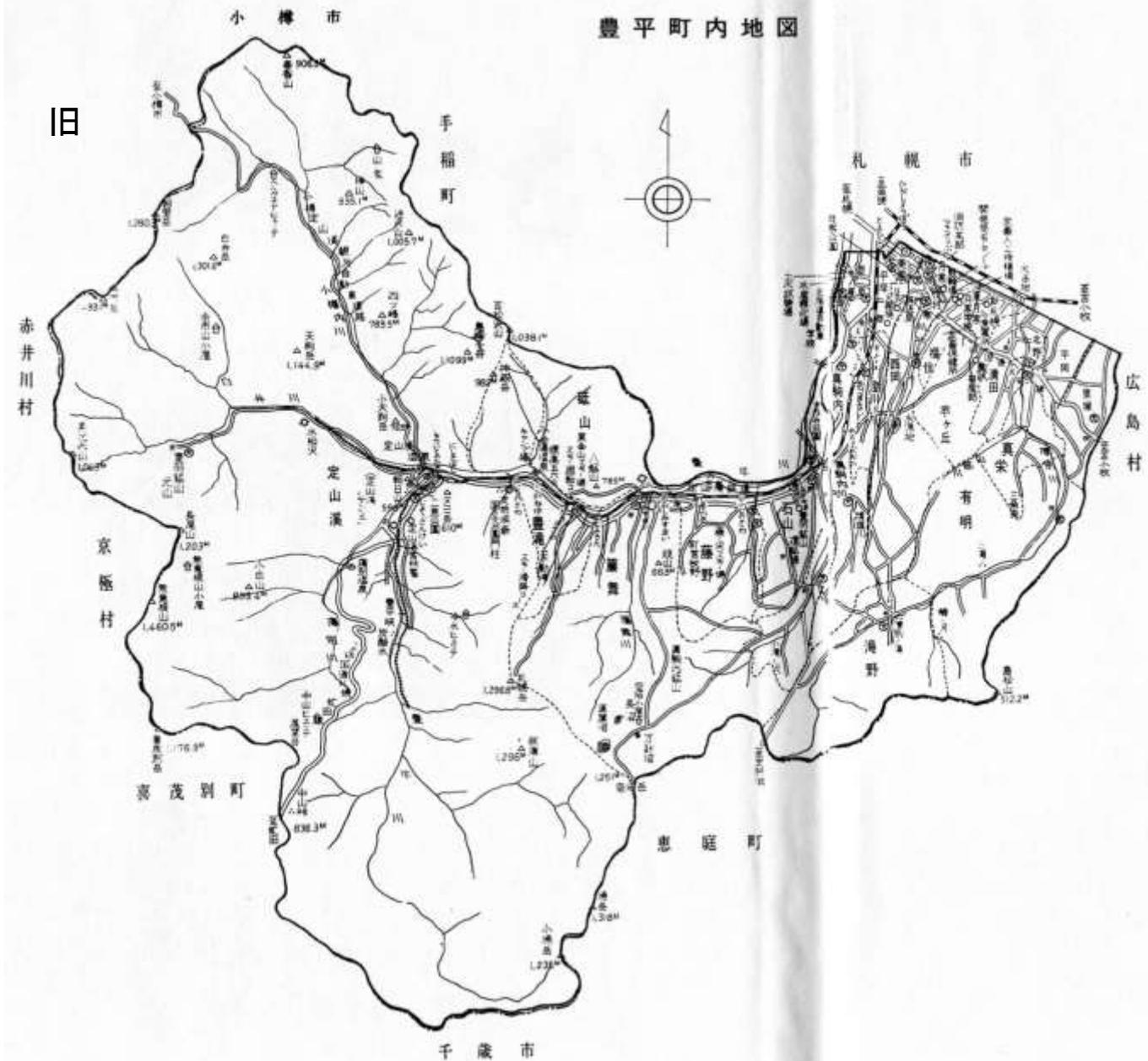
② 月寒の開拓

明治4年には、「募移民」として、岩手県盛岡から「185人（44戸）」が月寒村に入植しました。同じ時期には、豊平村・平岸村にも入植しています。

この「募移民」は、国から土地（1町歩＝1000平方メートル）・移住費用・住む家・食料などが与えられていて恵まれていました。その他の移民は、士族移民、結社移民、自移民など、いろいろありました。

明治7年には豊平村ができ、明治13年には、戸長役場が「上白石」に設置されました。区域は、豊平・平岸・月寒・白石・上白石の五つの村です。

明治41年には、「豊平町」と名前が変わり、役場が月寒に移りました。当時の様子を地図で確かめて見ましょう。



③ 厚別（あしりべつ）の開拓

「あしりべつ」の開拓の祖は、「長岡重治」さんです。長岡さんは、月寒村に移住した方の一人ですが、明治6年、単独で「あしりべつ」に移住し、開拓を始めました。今の「清田小学校の近く＝厚別川のほとり」です。

その翌年の明治7年には、「岡久曾」さんが、長岡さんの近所に移住してきました。このように、「あしりべつ」の開拓は、一つの村を作って開拓するのではなく、1戸ずつ入植してくるもので、開かれた土地も「清田小学校」の周りの僅かな所だけでした。

開拓は、募移民ではありませんので、住む家（想像図参照）を造ることから始めました。

右下の絵は、昭和46年の清田小児童による開墾の想像絵画です。

明治10年になり、長岡重治さんは現在の清田小学校のグラウンドあたりに、水田を開きました。これは、島松の中山久蔵さんが、苦勞の末に北海道で初めての稲作りに成功した品種の『赤毛』の「種もみ」譲りうけてのことでした。しかし、うまうまはいきませんでした。

その後、明治25年に「見上権太夫」さんが、厚別川の水を直接使うのではなく、「用水堀」を作り、水田に水を退く方法でした。それから、少しずつ米の収穫ができるようになり、用水堀も盛んに行われるようになりました。

用水堀では、吉田川用水（北野の低い土地から大谷地まで）や、真栄での「石田佐次郎」さんを中心にした用水堀づくりが行われ、清田・真栄・北野にひろがる「あしりべつ」の農業の基礎が作られました。

右の写真は、大正5年頃の撮影された「月寒種畜牧場」です。その後の農業の発展を地図で確かめてみま



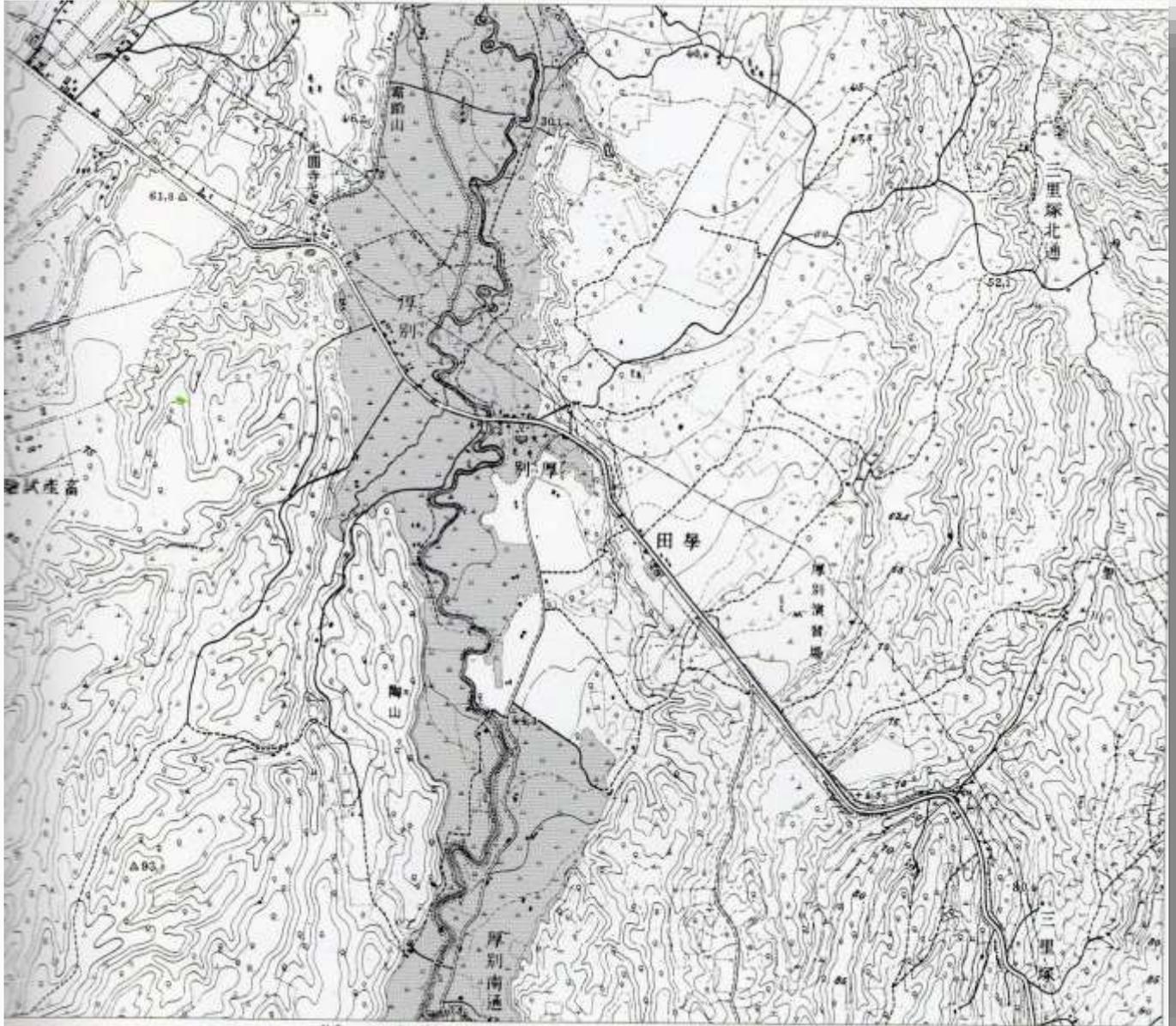
ながおが じゅうじし
長岡 重治氏



おがみ小屋



した。



この地図は、大正5年に「国土地理院」が発行した地図です。地図の中で、**濃い色**になっているところが「水田」です。

厚別川に沿って、地図の下の方から、真栄→あしりべつ（清田）→北野へと水田がひろがっているのがわかります。

また、大正8年には、リンゴ作りが始まりました。「三ツ屋宇多郎」さん（平岸村から移住した方です）が、現在の平岡（坂の上と呼ばれた所）に幼木を植えたのが始まりです。多くの人が、リンゴ栽培を始めて、昭和47年頃まで続いたそうです。

その様子も、地図で確かめてみます。**濃い色**が、リンゴ畑です。薄い色が水田です。昭和25年の国土地理院発行の地図です。



④ 三里塚の開拓

「開拓使」は、明治4年に「函館から札幌まで」の道路を造り始め、明治6年に完成させました。この道路は「札幌本道」といいますが、その内の「室蘭から札幌まで」の道路を「室蘭街道」（後の弾丸道路）と言います。

この「室蘭街道」には、札幌の創成橋を起点として、1里（約4キロメートル）ごとに目印の「石の塚」をたてて、「一里塚」「二里塚」「三里塚」と呼びました。

「三里塚」は、現在の三里塚小学校の近くの街道沿いになります（現在は、平岡南公園に復元して建てられています）。このことから「三里塚」（後に「里塚」となる）という地名がついたと言われています。（アイヌ語からではありません）

この頃までは、三里塚あたりに住んでいたのは、僅かな数のアイヌの人びとでした。室蘭軌道の両側は、大木が茂る森林でした。イタヤカエデ・ハルニレ・オヒョウ・アカダモ・ホウノキ・トドマツ・エゾマツなどが茂る森は、昼でも薄暗かったそうです。

明治8年になり、月寒村に移住してきていた「高屋寿太郎」さんが、三里塚に初めて住むようになりました。高屋さんは、開拓使から「10万平方メートル以上」の土地を借り受けて、炭焼きがまを作って、木炭の製造を始めました。ただし、1年を通して三里塚に住むのではなく、冬には月寒に帰ったそうです。

明治23年には、「田中重次郎」さんが住みつき、森林を開墾して畑を作り始めました。木炭の製造もしていたそうです。その後、明治24年に「高屋寿太郎」さん、明治26年には「西岡三郎」さん、明治28年には「土門留吉」さんと「北川徳兵衛」さんが入植しました。

明治37年・38年（1905年）頃からは、開墾と畑作りが盛んになりました。作物としては、いなきび・大豆・小豆・そば・タバコなどでしたが、自家用だったそうです。

明治40年頃になると、養蚕が始まりました。また、「土門留吉」さんが、「赤毛」という品種での米づくりに成功しました。収穫量は多くありませんでしたが、水苗代の苗がよく育って、「あしりべつ」や「大曲」の農家に売ることができたそうです。

明治41年（1908年）に、月寒村や平岸村と合併していた豊平村が、「豊平町」となり、住所が「北海道石狩国札幌郡豊平町大字月寒村字三里塚」となりました。

大正3年（1914年）には、20戸ほどで乳牛を飼育が始まりました。その後は、里塚霊園の辺りや、光が丘団地の辺りは、牧場として拡がっていきました。この頃の三里塚の戸数は、40戸弱だったそうです。

大正10年（1921年）には、三里塚小学校初代校長の「齋藤亘之」さんが、リンゴ栽培を始めました。5～6ヘクタールにまで据えたそうです。その後の三里塚は、農村としての歩みを進めるようになりました。

5. 第二次世界大戦

（1）第二次世界大戦中の札幌

昭和16年12月8日、日本はハワイの真珠湾攻撃により、第二次世界大戦に突入しました。この戦争は、「太平洋戦争・大東亜戦争」とも言われていました。

人びとのくらしは、全ての物資が戦争のために使われるようになったため、苦しいことばかりが続きました。順調に発展してきた札幌も例外ではありませんでした。

特に、昭和17年には「食料統制」が始まり、食料品の欠乏は大変なものでした。特に「米、麦、砂糖、食用油」は、手に入れることが難しくなったからです。そのため、お米のご飯の代用食として、「いも、カボチャ、トウキビ」が使われるようになりました。お米は、配給制度となり、大人の人が「1日に2合3勺」となりましたが、配給が遅れたり届かなかったことがあったそうです。

札幌の各地域では、出征兵士が、家族や親戚に見送られる風景が、次第に増えていったそうです。

また、家の灯りが外に洩れないようにするために、窓ガラスに細く切った紙を貼ったりして、「空襲」に備えたのです。

昭和20年7月14～15日には、「北海道空襲」がありました。札幌・室蘭・函館などの70の市町村に被害がでました。2000人が亡くなり、1万人以上のけが人、6千6百戸が壊されたました。空襲を受けても、被害が全くなかった地域もあったそうです。

札幌では、手稲・白石・丘珠空港・東苗穂の鉄道が空襲されましたが、被害は少なかったと言われています。ただし、近くの現在の「石狩市」の被害は、大きかったとの記録が残っています。

この空襲については、サイレンによる「空襲警報」が発令されると、それぞれの地区で手作りで造作した「防空壕への避難」も何度かあったそうです。

本州や四国・九州の空襲は、B29と呼ばれる爆撃機によるものです。北海道の空襲は小型の戦闘機によるものでしたので、その規模には大きな違いがあります。

（2）第二次世界大戦後の札幌

昭和20年8月15日、第二次世界大戦の敗戦によって、10月には米軍第八軍が函館と小樽に上陸し、直ぐに札幌にも進駐しました。この年は、大正2年と同じほどの大凶作となり、食料は不足し、代用食でも3度の食事はできなかったと言われています。

この食糧不足と同時に生活物資の不足は、札幌に深刻な影響を及ぼしました。戦前もそうでしたが、お米の配給は遅れたり滞ったりすることは、続きました。そのため、食料を求めるための「買い出し」に、地方に出かけました。一時は、「買い出し列車」と言われるほど、汽車が買い出しの人で満員になったほどです。

また、「たけのこ生活」と言って、食料を確保するために、身の回りの物を食料と物々交換する生活も続きました。

学校に関することでは、昭和16年からの「国民学校」の制度を、昭和22年に現在のよう小・中・高・大の六三三四制に改めたことです。

そのため、一時は今までの教科書にある軍国主義や超国家主義的な内容を墨で消したものを使ったそうです。

6. 明治から平成までの歴史年表

これまでは、時代に沿ってその様子をまとめてみました。ここでは、それらを簡単な年表にして整理しました。

- 明治 2年(1869年) 開拓使がおかれ、札幌の開拓が始まる。
- 明治 4年(1871年) 月寒村に岩手県から44戸が入植。
- 明治 6年(1873年) 「あしりべつ」(現在の清田・真栄・北野・平岡を総称した地名)に、長岡重治さんが入植。旧集落は、あしりべつ・三里塚・有明。
- 明治 6年(1873年) 札幌本道(室蘭街道、国道36号線)が完成。
- 明治 6年(1873年) 岡久蔵さんが、真栄に入植。
- 明治 7年(1874年) 豊平村、上白石村、山鼻村ができる。
- 明治 8年(1875年) 三里塚に高屋寿太郎さんなど2~3戸が入植(定住ではない)。
- 明治14年(1881年) 明治天皇が札幌本道を行幸。三里塚の地名の起こり。
- 明治14年(1881年) 三里塚に、福岡県から31戸が入植したが、その後転住。
- 明治23年(1890年) 有明の開拓が始まる(篠路屯田地給与地として=公有地と呼ぶ)
- 明治23年(1890年) 三里塚に田中重次郎さんが入植。
- 明治24年(1891年) 三里塚に高屋寿太郎さんが入植。
- 明治26年(1893年) 三里塚に西国三郎さんが入植。
- 明治27年(1894年) 月寒村から大曲・輪厚・島松が分かれて「広島村」となる。
- 明治28年(1895年) 三里塚に土門留吉さん、北川徳兵衛さんが入植。
- 明治35年(1902年) 月寒村・平岸村・豊平村が合併して、「豊平村」となる。
- 明治41年(1908年) 豊平村が「豊平町」となる。(現在の南区を含む)
- 明治43年(1906年) 豊平町役場が、月寒に移転。
- 大正 2年(1913年) 月寒と札幌中心部の間を「客馬車」が走る。
- 大正 7年(1918年) 豊平・平岸から定山溪までの「定山溪鉄道」ができる。
- 大正11年(1922年) 札幌市が誕生(人口は127044人)。
- 大正13年(1927年) 路面電車が、豊平地区まで開通。

- 乗合バスが、月寒まで開通。
- 昭和 2 年(1927 年) 路面電車が、市電となる。
- 昭和 16 年(1941 年) 第二次世界大戦が始まる。
- 昭和 19 年(1944 年) 「あしりべつ」地域が、清田・真栄・北野・平岡・有明・里塚の 6 区域に分かれる（三里塚は字名変更で里塚になる）。
- 昭和 20 年(1945 年) 第二次世界大戦が終わる。
- 昭和 23 年(1948 年) 里塚に電気が通り始める。
- 明治 23 年(1948 年) 南里塚に、里塚東部農業開拓団 37 戸が入植。
- 昭和 28 年(1953 年) 国道 36 号線の札幌と千歳の間が全面舗装となる(別名が弾丸道路)。
- 昭和 35 年(1960 年) 里塚地区の人口 343 人（71 戸）
- 昭和 36 年(1961 年) 豊平町と札幌市が合併。当時の豊平町の人口は、38894 人。
第 1 回雪祭りを開催。
清田団地造成工事を開始。
- 昭和 38 年(1963 年) 南里塚に「霊園」造成計画が持ち上がる。そのため、光が丘の近くの牧場を閉鎖し、立ち退き始める。
- 昭和 38 年(1963 年) 八望台団地の造成工事開始。
- 昭和 40 年(1965 年) 里塚霊園の造成が始まる（昭和 59 年に完成）。
- 昭和 44 年(1969 年) 地下鉄南北線が開通。定山溪鉄道が廃止となる。
- 昭和 45 年(1970 年) 北野団地・真栄団地の造成工事が始まる。
- 昭和 46 年(1971 年) 国道 36 号線（北野と里塚の間）が直線道路に切り替え。
- 昭和 46 年(1971 年) 道央自動車道の千歳と北広島の間が開通。
- 昭和 46 年(1971 年) 豊平地区の市電が廃止となる。
- 昭和 47 年(1972 年) 冬季オリンピック札幌大会開催。
- 昭和 47 年(1972 年) 札幌市が政令指定都市となり、「豊平区」が誕生。
- 昭和 48 年(1973 年) 羊ヶ丘通りの整備を開始。
- 昭和 49 年(1974 年) 札幌東部地域開発基本計画により、里塚・平岡で民間宅地開発開始。
- 昭和 51 年(1976 年) 地下鉄東西線が開通。
- 昭和 53 年(1978 年) 里塚東部ニュータウンの宅地造成開始。
- 昭和 54 年(1979 年) 道央自動車道の北広島と札幌南の間が開通。
- 昭和 54 年(1979 年) じょうてつ里塚ニュータウン（里塚中央）の宅地造成が始まる。
- 昭和 55 年(1980 年) イトーピア団地（桂台団地の道央道側）に、住宅が建ち始める。
- 昭和 56 年(1981 年) 里塚緑が丘団地の造成工事開始。
- 昭和 57 年(1982 年) 地下鉄東西線の延長部分が完成。
- 昭和 59 年(1984 年) 里塚斎場を建造。
- 昭和 59 年(1984 年) 地区計画制度による「平岡美しが丘地区」と「羊ヶ丘ニュータウン」が適用される。
- 昭和 60 年(1985 年) 下水道工事が始まり、水洗化トイレが実現。
当時の里塚地区の人口は、6332 人（1916 戸）
- 昭和 60 年(1985 年) 羊ヶ丘通りニュータウン（美しが丘地区）の宅地造成が始まる。
（国際地所が開発）

パストラルタウン美しが丘（真栄地区）の宅地造成が始まる。
（清水建設が開発）（10月に分譲開始）。

- 昭和62年(1987年) 2月10日羊ヶ丘通りニュータウン「地区計画制度」決定。
昭和62年(1987年) 2月10日パストラルタウン美しが丘「地区計画制度」決定。
昭和63年(1988年) 地下鉄東豊線開通。
平成2年(1990年) 羊ヶ丘通りが開通（市道9903号，平岸6条10丁目から美しが丘4条10丁目までの10.05km）
平成2年(1990年) 真栄が，条丁目となる。
平成2年(1990年) 札幌ハイテクヒル真栄の宅地分譲開始。
平成3年(1991年) 平岡公園が一部開園。
平成4年(1992年) 真栄番地・平岡番地の一部と里塚番地が，美しが丘条丁目となる。
平成4年(1992年) **美しが丘小学校が開校。**
平成6年(1994年) 地下鉄東豊線が豊水すすきの駅から福住駅まで延長。
平成9年(1997年) 清田区が誕生（吉田川を境界とする）（人口104988人）。
平成9年(1997年) 美しが丘緑小学校が開校。
平成9年(1997年) 里塚・美しが丘地区町内会連合会を設立。
平成10年(1998年) 里塚・美しが丘連絡所を開設。
平成13年(2001年) 美しが丘小学校に「太陽光発電装置」を設置（札幌市内で3校目）。
平成13年(2001年) 羊ヶ丘通りの美しが丘と大曲の間が開通。
平成16年(2004年) 「三里塚の碑」を復元し建立。

7. 美しが丘の誕生

(1) 札幌の開拓の始まり

明治政府は，明治2年（1869年9月の「箱館戦争」の終結により，北海道の開発を促進させるために明治3年に「北海道開拓使」を設置しました。

その年には，庚申農民として約400人が入植し，その土地は，「庚申一の村（現在の苗穂），庚申二の村（現在の丘珠），庚申三の村（現在の円山）」となりました。これが，札幌の開拓の始まりです。その後も北海道の開拓のために移民をされた人びとは，琴似村・山鼻村・手稲村・上手稲村・下手稲村・白石村・豊平村・月寒村・平岸村，などの開拓が進められたとの記録が残されています。

(2) 清田地区

「清田」は，「厚別川」を中心とした現在の「平岡，北野，清田，有明，真栄，里塚，美しが丘」の一角を指しています。この地への入植は，「村単位」ではなく，個別の入植が多かったのです。

清田地区は，当時「あしりべつ」と言われていました。明治6年（1873年）に月寒開拓団の一人であった「長岡重治」氏が「あしりべつ」に居住したのが最初の入植です。

本格的な開拓が始まったのは，明治20年頃からであると言われています。それは，厚別川とその支流と共に開拓が進められたからです。明治19年には，清田小学校が開校しています。

以前は，「厚別本通り」と言いましたが，昭和19年の字名改称の歳に，水田が美しいこ

とから「豊田」にしようとしたが、同じ字名があることから、美しい清らかな水田という意味で「清田」としたのです。地名のように、この地区は、米作りの街として昭和30年頃まで栄えたのです。

※ 「あしりべつ」は、厚別川を示すアイヌ語から、「アシリ・ベツ」=新しい川、或いは「アツベツ」=おひょうだも（樹木の種類）の川、等、幾つかの説があります。

※ 真栄は「厚別南通」、北野は「厚別北通」と呼んでいました。

(3) 里塚地区

① 三里塚の時代

明治14年に明治天皇行幸の折、道しるべとして「三里塚」を建てたことから「三里塚」という地名が始まりました。

明治23年には、田中重次郎さんが最初に入植してから、開墾がはじまりました。この頃は、天然林が生い茂る地域でしたので、「林業」のかたわら「畑」に開墾する日々が続きました。やがて、水源があるところは「米作」が始まりました。

明治30年「八幡神社」が建立されました。昭和39年には、「三里塚神社」となりました。現在の美しが丘1条9丁目です。このことから、現在の国道36号線（札幌本道）を鉄んだ向かい側に、三里塚の地域が広がっていったことが分かります。

その後、徐々に開発が進められ、現在の美しが丘8・9丁目あたりは、住宅が建つようになりましたが、多くはありませんでした。それは、現在の美しが丘地区の多くは、山林で覆われていたからです。

② 里塚の時代

昭和19年の字名変更により、美しが丘地区を含めて「里塚〇〇番地」という住所になりました。この住所は、平成4年まで続きます。

昭和23年に里塚地区に電気が通り始めてから、現在の美しが丘7・8・9丁目あたりは、地図で確かめると住居が少しずつ建ち始めてきました。牧場も開かれていたようです。しかし、現在の美しが丘3～6丁目は、昭和58年頃まで依然として開発がされていませんでした。小高い山や沢地が多く、僅かな「けものみち」があっただけでした。

三里塚地区は、明治14年（1880年）に福岡県移民団の報国社に入植したとの記録が残っていますが、その後の記録はなく解散したと思われます。また、ある資料によると、明治8年頃に2～3戸の農家が入植したらしいとありますが、開拓が進んでいない地区での農業経営は、無理だったとの話も残っています。しかし、明治14年9月に明治天皇ご行幸により、三里塚を通る街道は、歴史上空前の大行列を見るのです。

里塚の開拓の祖とされるのは、「田中重次郎（明治23年）・高屋寿太郎（明治24年）・西国三郎（明治26年）・土門留吉及び北川徳兵衛（明治28年）」の各氏です。その中で、高屋氏は、明治8年に月寒村から移住した方の一人です。土地の払い下げは、明治30年頃まで続きました。

本格的な開拓が始まったのは、明治37～38年頃だと言われています。エン麦・稲きび・大豆・小豆・蕎麦などを栽培し、タバコやリンゴのなども作られていたようです。水田は、明治末期に土門留吉が手がけました。

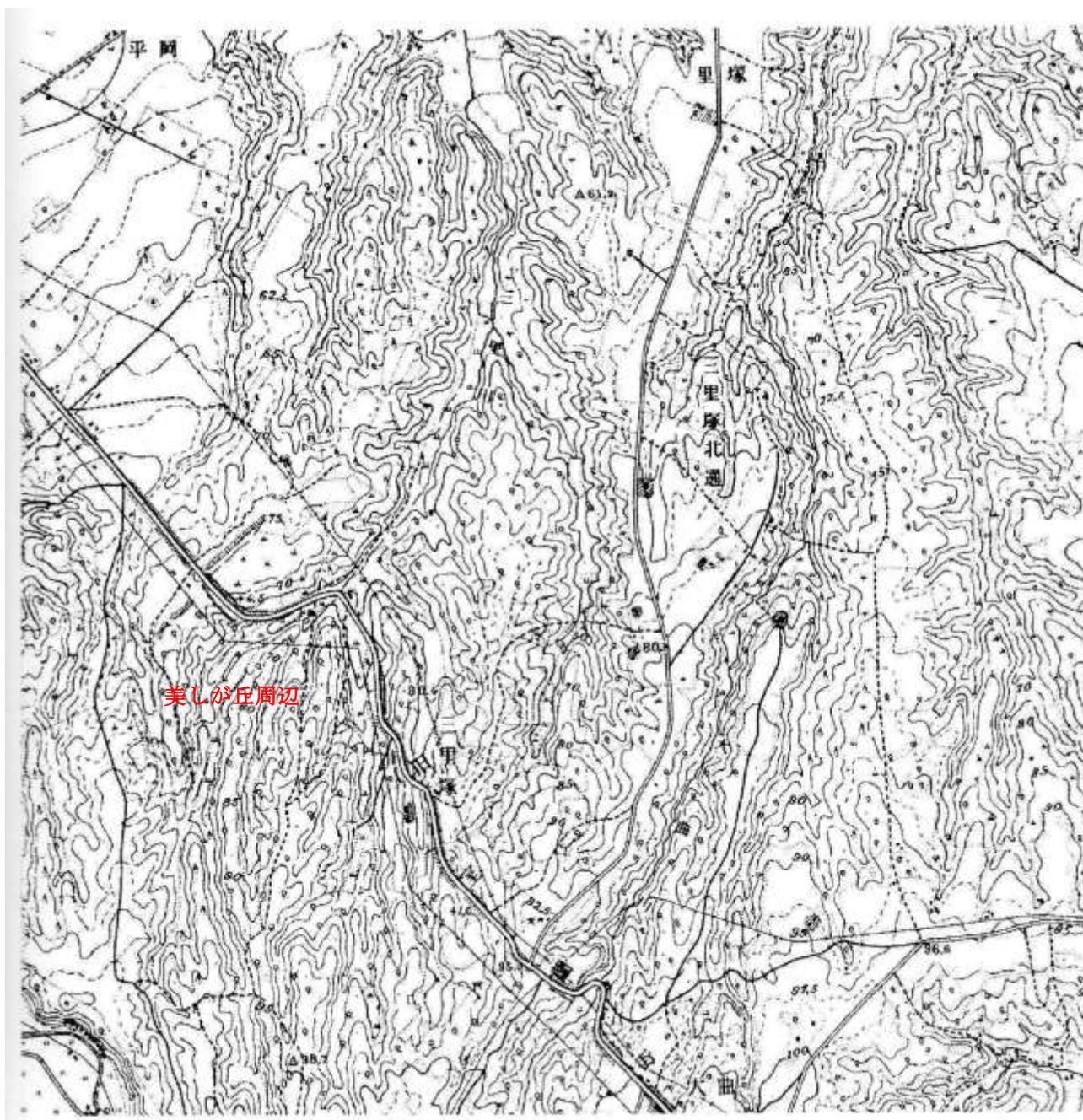
※ 明治天皇ご行幸は、札幌から室蘭までの34里（約136km）の目印として1里毎に標識を建てました。この標識が「塚で、札幌から3里（12km）の地点が、

「三里塚」となる。これが地名の起源です。因みに「二里塚」は、月寒東1条19丁目にあり、基点は「創成橋」（正確な場所は確認されていませんが、碑などが建立されている）だと言われています。

大正10年には、平岡地区と共にリンゴ栽培が行われています。大正11年には、札幌市が市制の施行をしましたが、清田地区・真栄地区とも、当時は「豊平町」でした。

昭和8年には、三里塚小学校が開校しています。昭和44年には、里塚霊園の造成が開始されました。

次の地図は、昭和25年ごろの三里塚地区の地形図です。里塚地区に電気が通り始めてから間もないのですが、現在の美しが丘7・8・9丁目あたりは住居が少しずつ建ち始めていることがわかります。現在の美しが丘3～6丁目は、昭和58年頃まで依然として開発がされていませんでした。小高い山や沢地が多く、僅かな「けものみち」があっただけでした。



(4) 真栄地区

真栄は、昭和19年の字名改称の際に、この土地が神仏の恵みで栄えるようにとの願いから「真恵」にしようとしたが、改めて繁栄の意味を込めて「真栄」としたのです。この辺りは、「厚別南通」が主で、三里塚・器械所・厚別川沿岸・厚別西山・厚別焼山などが含まれています。「美しが丘」は、真栄・里塚の一部とも考えられます。

真栄地区は、昔は丘続きの地形でした。しかし、長い間の厚別川の浸食により掘り下げられた所でした。石器や土器が水田から発掘されていることから、先住民族が住んでいたと思われま

す。また、水利を活用して、明治13年には水車を備えた「厚別川山水器械所」を建設し、柁や頭在を多量に生産しています。さらに、明治24年には、「吉田重次郎」氏が、厚別川に用水路を造成しているのです

。

41
厚別川山水器械所



「写真集；明治・大正・昭和の札幌」より（明治12年頃）

昭和45年には、北野団地と共に「真栄団地」の造成が開始されました。平成2年には、札幌ハイテクヒル真栄の分譲開始と、羊ヶ丘通りの供用が開始されています。

(5) 美しが丘地区

当初は、「里塚西地区」と言われていましたが、真栄地区の延長線上にもある地区です。一帯は、開発がされないままの雑木林が続き、緩やか傾斜のある小さな丘陵地帯でした。

国道36号線（札幌本道・室蘭街道或いは弾丸道路とも呼ばれていた）を千歳方向に向かって右側（南東方向）の一帯でした。

※ 札幌本道・室蘭街道は、北海道開拓の要路として開かれた道路です。箱館奉行所や松浦武四郎が、調査し検討したことに始まります。1857年に、今の銭函→星置→島松→千歳の開削をし、「札幌越し」「千歳越し」とも言われた道路です。明治5年には、開拓使顧問であるケプロンの指導のもとで、札幌と千歳の間の大工事を行いました。これが「札幌本道」「室蘭街道」と呼ばれたのです。この道路は、函館と森を結び、さらに新室蘭港に至り、千歳そして札幌を結ぶという「大道路網」の一環だったのです。

昭和28年には、札幌と千歳の間が、北海道最初の舗装道路（幅7.5m、総延長35km）として完成（俗には「弾丸道路」）したのです。

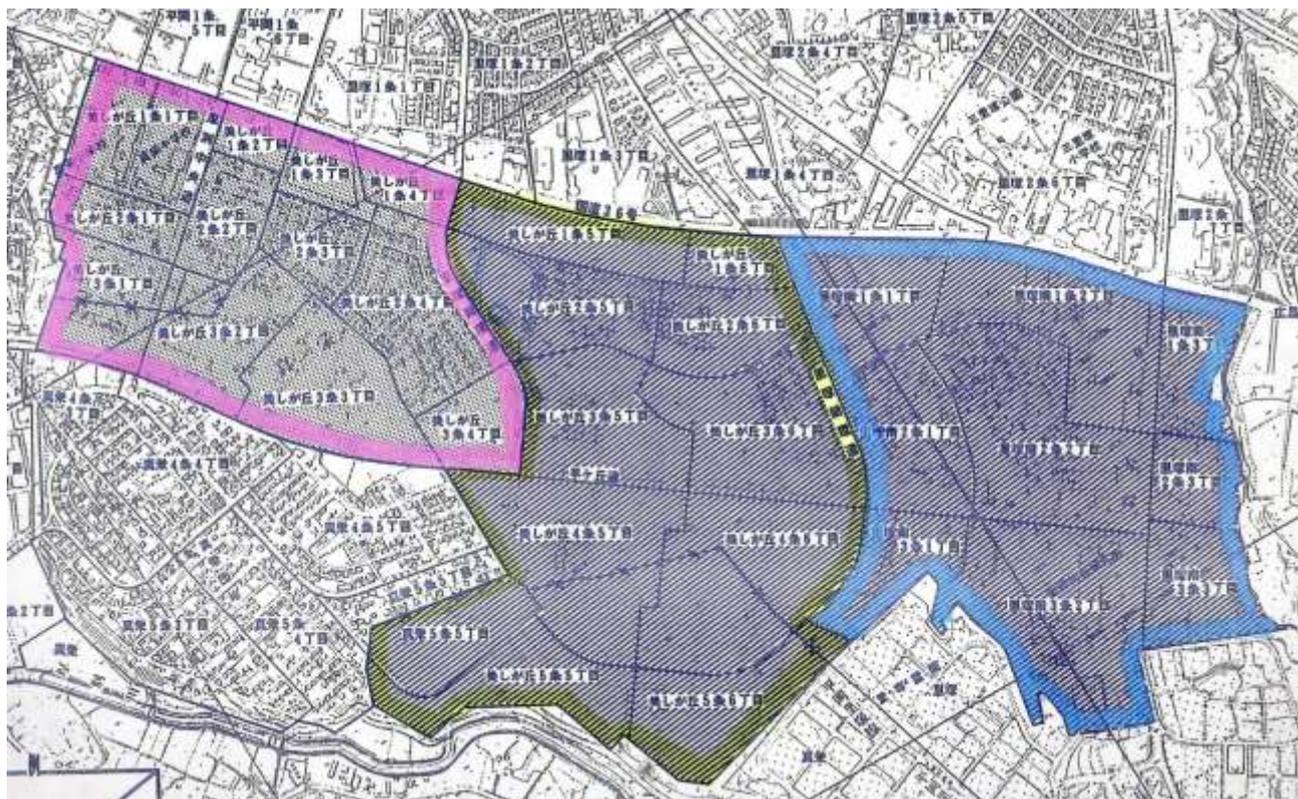
昭和30年代からは、国道36号線の沿線は市街化が進み、昭和50年代からは、真栄地区や清田地区には、民間企業による住宅団地が造成され、以前の田園風景を見ることができなくなりました。

いわゆる「里塚西地区」も、昭和62年から民間企業が「羊ヶ丘ニュータウン」として販売を開始したのです。平成4年には、約1100戸が建築された。地名は、業者が命名したこともあります。居住される方々の意向も大きく影響して、「美しが丘」となっています（一説には、札幌市の施設の名称と同じになることを敬遠したというお話があります）。

その後、平成2年には、環状通（平岸）から道央自動車道の北広島インターチェンジに通じる都市計画道路（現在は、輪厚で国道36号線に繋がっています）が厚別東通まで完成（羊ヶ丘通り）したことで、真栄地区・里塚地区が一層の発展を遂げていくのです。

平成4年には、真栄小学校と三里塚小学校を母体校として「美しが丘小学校」の建築が開始されて、平成5年3月26日には、札幌市202番目の小学校として開校式を迎えたのです。

次の地図は、開港前の地域の住居表示を示したものです。



(6) 美しが丘の誕生

昭和59年12月18日に、札幌市企画町制局計画部計画課の許可により、「羊ヶ丘通りニュータウン地区」(現在の美しが丘1条3丁目から6丁目まで)の開発が開始されることになりました。開発に携わった会社は、国際地所開発(株)さんです。

めざしているのは——暮らしがふくらむ街づくりです。



羊ヶ丘通ニュータウン

■完成予想図



社内資料

- ノムラモシ
- ヤマモシ
- 夏菜
- ズミ
- 園樹
- ライラック

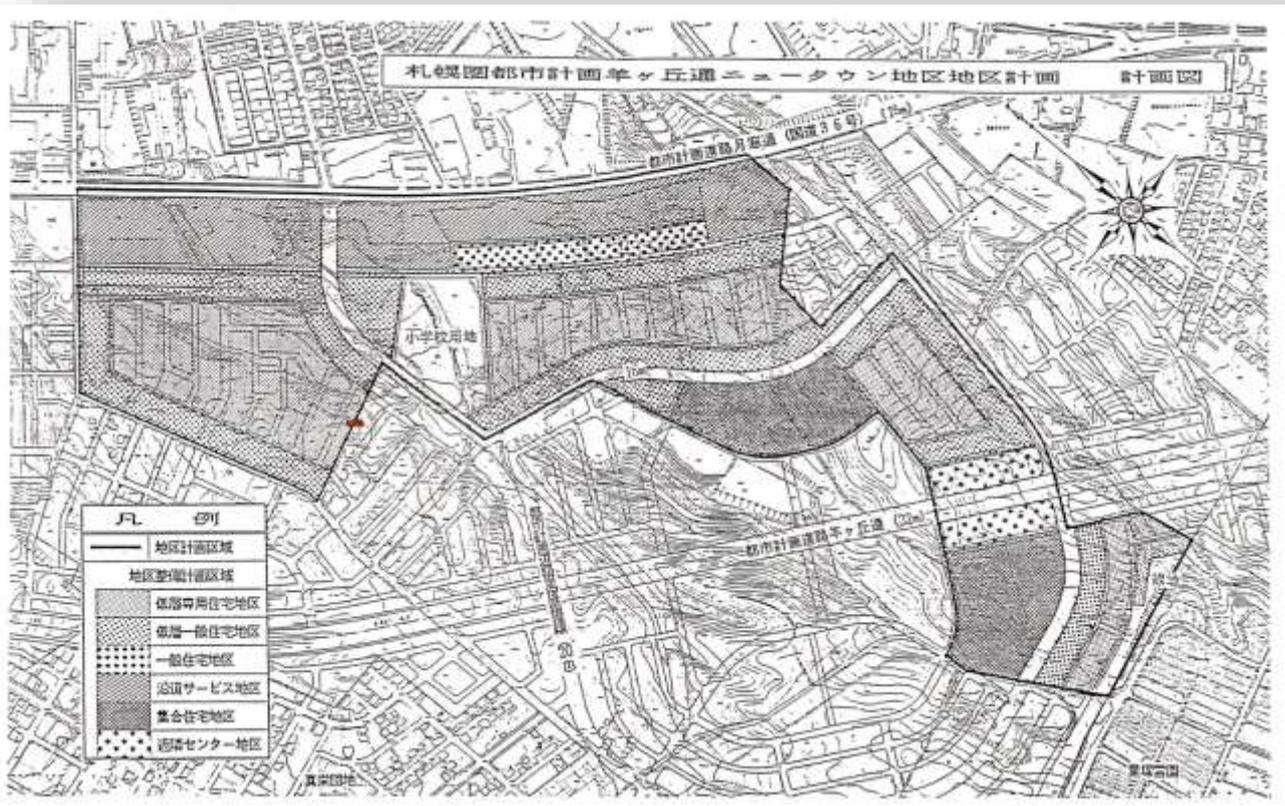
■沿道サービス業務用地物件概要

●事務所：札幌市羊ヶ丘通1条3丁目 ●交通：羊ヶ丘通沿線
 ●住宅：札幌市羊ヶ丘通1条3丁目 ●交通：羊ヶ丘通沿線
 ●商業：札幌市羊ヶ丘通1条3丁目 ●交通：羊ヶ丘通沿線

■集合住宅用地物件概要(5ブロック)

●第1期：札幌市羊ヶ丘通1条3丁目 ●交通：羊ヶ丘通沿線
 ●第2期：札幌市羊ヶ丘通1条3丁目 ●交通：羊ヶ丘通沿線
 ●第3期：札幌市羊ヶ丘通1条3丁目 ●交通：羊ヶ丘通沿線
 ●第5期：札幌市羊ヶ丘通1条3丁目 ●交通：羊ヶ丘通沿線
 ●第6・7期：札幌市羊ヶ丘通1条3丁目 ●交通：羊ヶ丘通沿線

独立戸建住宅用地	販売開始時期
第1期	昭和52年10月
第2期(4)	平成2年2月
第2期(4)	平成元年11月
第3期	平成2年2月
第5期	平成2年7月(予定)
第6・7期	平成3年4月(予定)



上のパンフレットは、国際地所開発(株)さんが発行したものです。下の地図は、札幌市の「地区計画制度」によるものです。宅地造成が進み、昭和62年10月から「羊ヶ丘ニュータウン」として、分譲販売が開始され、次第に家が増えていきました。

同じく昭和59年12月18日には、札幌市企画町制局計画部計画課の許可により、「**平岡美しが丘地区**」(現在の美しが丘1・2条1丁目から2丁目までと3条1丁目あたり)の開発が開始されることになりました。開発に携わった会社は、清水建設(株)さんです。ご担当の猪俣春人様のお話では、この地区は、社内公募により「パストラルタウン美しが丘」の名前が決定し、分譲販売が開始されたそうです。「美しが丘」の名前の出発点と言ってもいいのでしょうか。

(地区計画制度とは) = 札幌市地区計画課 (211-2545) さんのお話から

札幌市の各地区には、「まちづくりのルール」が決められています。それが「地区計画制度」なのです。美しが丘もその一つの地区です。

この制度は、安全で快適で美しいまちづくりをする時に、道路・公園・下水道・などの公共施設や緑化を決めます。同時に、建物の使い道を決めるものです。前に示した地図で分かるように、6つのゾーンに分けています。その他に、土地の広さは180平方メートル以上・建物と道路境界線との間は1.5メートル以上、塀の高さは1.2メートル以下、1戸建の住宅の高さは9メートル以下、などが定められています。

(地名と条丁目) = 札幌市戸籍住民課 (211-2496) さんのお話

美しが丘小学校が開校する前の住所は、「札幌市豊平区里塚〇〇番地」でした。学校を建てる時の名前は、「**里塚西地区小学校**」でした。

地名は、札幌市と地域のみなさんが相談して決めるそうです。札幌市は、いろいろな便宜をはかるために、基本的には「条丁目」となるようにしています。

美しが丘の地名は、平成2年頃から「羊ヶ丘ニュータウン」の町内会と札幌市が相談して決めたそうです。その発端となったのは、「**パストラル=和訳では、のどかな、牧畜の、田園生活の=タウン美しが丘**」と言われていています(清水建設;猪俣春人様のお話)。

正式に「美しが丘〇条〇丁目」になったのは、平成4年11月2日でした。これまでの里塚番地を条丁目に変更したのです。

現在の7・8・9丁目を「里塚南〇丁目」とする案もありましたが、美しが丘1条から5条まで、1丁目から10丁目としたのです。

ですから、美しが丘小学校が開校したのは、平成4年11月1日(開校記念日)ですから、この地区名にそって「美しが丘小学校」(札幌市豊平区美しが丘2条5丁目1番1号)となったのです。

平成9年には、豊平区から分離して「清田区」になり、住所も「札幌市清田区美しが丘2条5丁目1番1号」となりました。

(地名上の姉妹校)

横浜市青葉区美しが丘2丁目29には、横浜市立美しが丘小学校があります。地名でいうと、姉妹校になるのでしょうか。横浜の美しが丘も、札幌市の地区計画制度で作られた「まちなみ」だそうです。札幌よりは細かなルールを作っています。「都市景観」を大事に



した「まちなみ」で、歩行者専用道路まで造っているそうです。

8、清田区について



清田区は、平成9年に豊平区から
分区しました。

地図の縮尺は違いますが、清田区
になってからは、地区名が3つ増え
ています。

美しが丘・平岡公園・里塚緑ヶ丘の3つです。この「清田区」について、少しですが、様子を確認めます。

(1) 地区の名前の由来

- ① 清田＝以前は、厚別本通（あしりべつ ほんどおり）と呼ばれていた所です。美しい清らかな水田地帯であったという意味でつけられました。
- ② 平岡＝以前は、厚別本通の一部で、「坂の上」と呼ばれていた所です。平らな岡（丘）という意味でつけられました。
- ③ 北野＝以前は、厚別北通と呼ばれていた所です。厚別の北に広がる原野という意味でつけられました。
- ④ 有明＝以前は、公有地と呼ばれていた所です。この「有」の字を生かして、明るいの意味を加えてつけられました。
- ⑤ 真栄＝以前は、厚別南通と呼ばれていた所です。この土地が神様のお恵みでますます栄えるようにとの願いをこめて「真恵」にしようとしたのですが、意味の通りに「真栄」とつけられました。

※ 美しが丘地区は、昭和53年になって、住宅が見つかりました。
昭和34年；国土地理院が発行した地図

※ 美しが丘の位置を見つけたでしょうか。



昭和53年；国土地理院が発行した地図

※ 美しが丘の位置を見つけたでしょうか。



昭和57年；国土地理院が発行した地図

※ 美しが丘の位置をみつけたでしょうか。



(平成5年の航空写真)



(平成21年の航空写真)



●印が、美しが丘小学校です。

10、美しが丘の未来

私たちの美しが丘小学校は、平成29年度で「開校25周年」を迎えました。『美しが丘小学校の25年間のあゆみ（軌跡）』は、別のページから詳しく述べています。

札幌の開拓が始まってから、「月寒村」ができて、その後「三里塚」となり、「豊平町」へ、さらには札幌市と合併し、現在に至るまで140年以上が過ぎています。

札幌市は、昭和47年（1972年）の冬季札幌オリンピックが開催されてから、大きな発展を遂げてきました。人口が100万人を越えたことにより「政令指定都市」にもなり、現在は、「10の区」となりました。人口は、190万人を超えました。

北海道も開拓と開発が進み、現在は9つの総合振興局と5つの振興局に分かれ、179の市町村（札幌市の10の区を合わせると189市区町村）になっています。

この189市区町村は、それぞれに「まちづくり」の考えを持って、努力しています。先ず、私たちは「まちづくり」の夢や願いや期待を持って努力を積み重ねなければなりません。

その考えは、清田区→札幌市→北海道へとその輪を拡げることが大事でしょう。そのためには、みんなで工夫し、協力しながら実行することが大切です。

そこで、一つの資料があります。それは、平成29年7月1日現在の資料です。この資料だけでは、難しいかも知れませんが、アイデアを出し合ってみませんか。

	人口（人）	人口密度（1人／1km ² ）	面積（km ² ）
中央区	240998	4743.4	46.43
北区	287426	4391.6	63.48
東区	264132	4478.8	57.13
白石区	210790	5906.9	34.58
厚別区	126510	5270.4	24.38
豊平区	220575	4743.4	40.35
清田区	115710	1953.4	39.70
南区	140072	227.7	657.23
西区	214801	2819.0	74.93
手稲区	141616	2453.3	56.72

このアイデアを出すためのきっかけになる言葉があります。中国の「大学」という書物の中に、『日日新 又日新』という言葉があります。

意味は、「昨日よりは今日、今日よりは明日、よりよくなろうとする」です。この意味は、アイデアを見つけるもともになると思います。

もう一つは、美しが丘小学校のモニュメントです。作品名は「飛び立つ日」です。作者の近藤泉さんは、「この作品は、今まさに飛び立とうとしている子どもたちを表現しています。新しい未来が待っている大空に、大きく翔いてください」と話されていました。

『よく考え進んで学び、明るく思いやりを持ち、最後までやり抜く』美しが丘の子ども

は、戦前に開校した小学校。（ ）は、開校年度。

<参考資料>

北海道 179 市町村







<参考資料> 札幌市10区と近郊の市町村

